

アフリカ英語圏 9カ国から理数科の先生来日

秋田の中学校で模擬授業

この事業は昭和五十八年、当時の中曽根康弘首相が提唱し、外務省が決定した青年招聘事業。二十一世紀のための友情計画の一端、五十九年から国際協力機構（JICA）が主体となって行い、平成十七年度までに約百二十の国と地域から約二万五千人を招聘し、各国の人材育成と相互理解に貢献している。

今年度はアジア、大洋州、アフリカ、中南米、中近東など百二十カ国・一地域から、千六百八十人を招聘する。このうち、九カ国・千四百人のアフリカ（英語圏）中等理科教員教員グループは先月

パソコンで金星の動きを見たり、電流と回路の表裏に参加—アフリカ英語圏九カ国の理科教員二十四人が今月四日から九日間、秋田県を訪問し、模擬授業などを行った。政府開発援助（ODA）の一端として、わが国が発展途上の青年を招聘（しよへい）する事業の一つに参加した。学校や自然科学施設を訪問、専門分野の研修、ホームステイ受け入れ家庭などを通じ、教員面だけでなく人々との交流も深めた。



三日に来日し、九月四、五日に地方分野別プログラムとして秋田県を訪問し、秋田市立首里三中学校（原田校長）生徒教

六十四人を訪問した。一行は、パソコンを使った理科と数学の授業や、理科室での「回路を流れる電流」の授業に参加。金星への太陽光の当たり方や立体の左右前後から見

金星の動きをパソコンで学ぶ授業に参加する教師達

「テュロレットを作るのを覚えて行ってきた人（上）ダイヤモンドベルが面白い」と、その印象を語る。タンザニア教育者の物なりの呼び掛けに、生徒、理数科教師ルシアさん

生徒が積極的に参加し
楽しんでる姿印象的

お辞儀とてもいい文化
自分の国でも行いたい

は両手を上げて元気よく挨拶。今幾つかの問題を抱えている。理科教員陣の傾向があり、貧困や妊婦、悪習慣によって退学率が高い。授業は、人数が多いことなどで説明しにくい。セブシエル教育者の数

シエラ・レオネの教師は、会った人におじぎをまわすのは、他人を敬うことだといふ文化。自分の国や家庭でも行いたい。日本人は一生懸命に勉強するので、今の日本が羨ましいといふと感動を語った。

一行は、ほかにワカンダ、エチオピア、ケニア、ナイジェリアから参加。県内の受け入れはJICAの委託を受け、ボランティアグループ「秋田県国際交流友の会（佐藤英明会長）が担当し、学校や施設訪問の手はずを整えた。

一行は、県立明鹿水族館（AO）や秋田市立自然科学博物館の訪問、秋田大学の専門研修、ホームステイ受け入れ家庭などと交流を深め、十日からは東京や千葉の学校を訪問するなど、二十一日帰国する。

その後、三クラスに分かれて各国の地理や言葉、自然、民族衣装などを紹介。

は、数学と理科の授業を

（秋田支局・伊藤志郎）

ふんねとポイントライオン